

764
760

御所櫻堀川夜討脚本
刈萱桑門築紫轆脚本
合本

088548-000-4

特52-612

御所櫻堀川夜討 下の巻・刈萱桑門築紫轆

松本 平助 / 著

M27

DBJ-0207



御所櫻堀川夜討脚本下の巻

原著者 三好

補綴者 松本



侍従 太郎館の場

(上の巻續き)

上しはらくをくの淵に打連伴ひ人にける年若けれ共利發者忍は坐配し
然ば此間には寸母様此頃はか顔も見ぞか懐しやと立寄れば
忍上るしと皆をの跡に残り仕卿有てかわさの傍に寄り

忍御無事を
みわさ一其方も意に有たの明暮側に引据へて見れ共飽ぬ獨子を
上一手放して置く親心親懐しと思ふより百千倍とは知ぬかや假令御前の御
意に入共必を朋輩衆を袖にすな

同上林の中にも喬木は風が枝をば折ぞとよ一人寢覺めの度毎に逢はゞ何云
ふ斯云ふと溜て置た數々も逢ば嬉むうて口へ出ぬ

同一何を云ふも彼を云ふも身を大事に頼ふてばしたもんなや

上「手を取り交し撫交し心を盡す親と子の別りなき風情ぞ道理なる稍有て侍従太郎奥より出る屈托顔がわさ目疾く

トわさ仕打宜敷忍と手を交し仕仰ある此時正面襖を開きて太郎手をこまぬき乍ら二重へ扣へるわさ兩人分れて手をつき

わさ「是はく侍従様(ト合方)お顔の色悪ふお眼の内も潤んで氣の浮ぬ御容跡御内談と云は

太郎「いやく氣遣の氣の字も無い氣の浮ぬと微塵も無く心がしよぎくとぼんを待兼る(ト思入有て)ヤ能い次手じや態と往ても逢ふと存じた幸じや一寸物語致そう別の事でもない物でござる

わさ「物と被仰るは (ト太郎氣まり悪き仕打ど)

太郎「拙者其許の息女郎ち此忍に大執心

わさ 忍「エー (ト胸り顔見合せ忍耻かしくすさる)

上「エイと親子が興さまし娘は母の後蔭少ふ成て身を忍ぶ

太郎「是れくさまして貰まい惚てく今日入ッ迄の内に貰はねば此方の上面が瓦羅りと違ふ今奥の時計を見たが九ッ過半時には成るまい秋の日は短かい八ッに成るは手間暇入らずサアかつと云て貰いたい時忠の執權侍従太郎年に不足もな

い男浮氣でない虚言申さぬサア下さるか……何んとでござる

上「サアどふじやと眞面目に成ればげらくと嘲り笑ひ

わさ「はく、く、ア有難い忝けない

上「深山の斧のこけら屑誰取上る人もなく徒らに埋もる、我娘を御執心

同「進せましたら何んとなされます

太郎「ハテ女房に

わさ「彼の花の井様と云ふ美しい奥様の有上に

太郎「いやてや花の井は暇やつて忍を奥様に致す所存侍冥利愛宕白山偽りない

上「云後ろに立聞花の井くはッと急き顔は上氣の瓜紅ちすぢ走り寄り

ト此少し前より花の井上手障子を開き伺ひ居り此時出て二重太郎の下手へ坐し

花の井「何んじや花の井は暇呉れる何をどうして暇下さる仔細が有ふ譯聞ねば自ら

も武士の娘遂いぐつくと暇は取ぬ其譯聞ふ (ト坐を進め腹の立つ仕打)

太郎「ヤア洒落さい昔より女房は衣服に喩へ飽たれば何んでも脱替へて外の着物を着る哩是より外に仔細はない小言云すと歸れく

花の「フム聞へた飽れて添ては面白くない暇取た實正忍を女房に持やるの

太郎「諄言く　花の「持て見や、

同「持て見せうぞ　同「見せるとや

同「チ、サ見せふ

上「負す劣らず争へば見兼ねておわさ押隔て

トおわさ舞臺好き所へ出て思入有て

わさ「ホンニ呆れて太郎様には寧ろ手が付られぬ慮外乍らはしたない奥様假令いか

様に被仰る共お前を去せてそんならばと娘を進せとふなわさじやと思召か

上「女御后に成迎も道ならぬ榮花を悦ぶ様な私共ではござんせぬ氣遣せず

共早ふ中直らしやんせ　（トこなし有てよる敷）

同「しつかい氣遣の沙汰じやまで

上「嘲ければ

太郎「すりや氣遣の様に見ゆるかや

わさ「様な段ではござりませぬ眞氣遣でござり升哩のチ

太郎「彼の氣遣に……　（ト花の井と顔見合せ思入有て俯く）

上「ハアはつと夫婦は顔見合せしばらく詞もなかりしが稍有て花の井實に

や思ひ内に有れば色外に顔るゝ氣遣共狂人共見ゆる苦心は疾ふから氣遣

成て居る其分は　（トこなし有て）

花の「今日武藏殿の参られしは卿の君の首打て渡せと鎌倉よりの御難題其爲に梶原

半次景高土佐坊昌俊の上洛撃て出さねば叶はぬに極り悲しや卿の君様のお首を

取に見えた哩のウ

上「お幼稚から夫婦の者が手しはに掛け育てあげた彼のお子畏つた御勝手

に被爲れと抑もや首がさらされふか

同「殊更只ならぬお身の上辨慶殿も斬兼て取つ置つ思案の上

上「昔しより無い慣ひではなし人の見知つたお子でもなし身代りを立てま

いか其身代りは誰彼と穿義の上

同「年頃みめかたちも相應した此忍夫迎もか家譜代相傳の人でもなく命を下されど

云程の恩を見せたと云ではなし忍を無理に女房にお貰なされ底で私が愷氣するの

憎い奴じやと暇が出る心得たと暇取はさア今日の唯今から忍は侍従の女房我女房

に成るからは汝が爲にもお主の身代り死で呉れどのツピきさせず命をお貰ひ成れ

ぬか是能るふと談合づく

上「不調法な夫婦喧嘩もお主の命助けたさ身勝手な事を云道知らず物知す

と輕蔑も耻けれと正眞の脊に腹とやら

同「コレおわさ女郎了簡は有まいか

上「夫婦の者の苦みを思遣てと計りにてかつばと伏して泣ければ夫も坐したる姿を改め

太郎「浮世の中の無心と云に是に上越す無心も有まい其返報には夫婦の者を八ッ裂にも成され些とも惜まぬ……惜まぬ命は二ツあれ共一ツも今日の役に立ぬ本意な

上「無念さ悲さを推量あれと計りにてはらくと泣ければ忍進み出て神ならぬ身は其んなことは存せいで年に似合ぬ恥知ずと思ひ悔りし

ト太郎拳を握り涙をしばたしく宜敷忍泪を拭ふて舞臺好き所へ進み仕打よる敷忍「十年廿年の宮仕もたつた一日御奉公申てもお主様には違ひはない其御難義が何と聞て居れふぞ私が様な者の首でもお役にさへ立ならば願ふてもお身代りに立た

上「さア首切て御用に立て下さんせ

同「申母様四年跡の大煩ひ舞臺は利かず死る命をお前の精力たつた一ツで助つたれど其時だと断念めて下さんせいなア

上「私はお身代りに死ますと聞も敢て飛掛り抱しめく

ト忍泣くわさ忍を後へ遣り出て

わさ「ア、是つかく」と物云んないの黙つて居よぞチホ、はんに此子は一人て出来た子ではでさんせぬ顔も知らず名も知らぬと父親がどざり升其人を尋ねて渡す迄は指もさゝせぬ卒爾に斬しやつたら聞事じやとさんせぬぞ

太郎「コリヤ、如何に狼狽たれば逆母親斗で出来る子が三千世界に有ふか其上顔も知す名も知ぬ父親を尋ね手渡しするとは何にを印に尋るぞ

上「偽り者表裏者得心せぬ者無理やりに身代りに立ふとは云ぬわい

同「子心にさへ主従の道を辨ふるに見限り果たる女め娘を連れて早歸れ

ト太郎刀を杖に片膝を立てる

上「心忙し立て失せふ女房此方へと立上るなふ申く待てたべ

トわさ泪を拭ひ掛る仕打

わけ「偽り者と云れては親故此子が顔汚し顔も知す名も知ぬ夫を尋ねる印は……

ト両肌をぬく

上「是と上の一重を押腕げば右は變らぬ詰袖に左斗が振袖の濃紅の染模様橋ならぬ袖の香の昔床しく忍しく是を御覽被爲ても仔細を云まば御合点が参まじ娘が聞前耻した昔話なれ共

わさ「私は元西の國の在所者親は所の何某十八年以前

上「頃は夜も長月の廿六夜の月待の夜

同「私が所は諸方の入込み誰とは知れ袖を引れて

上「あのいものゝを云間もなく闇がり紛れの迷ひ轉寢辛や人の定音に驚いて其人は起往袂を捕ゆる拍子行拍子千裂れて我手に残りしは此振袖假寢の情はたつと一度の淺けれども妹脊の縁や深かりけん其月より身も重く懐胎し

同「友達衆の介抱にて産落せしは此忍父なし子産では家の耻子を捨て嫁入せよと親々の異見御尤とは思乍ら二人の夫は重まじ縁有ば社子迄産だ物此そでを知るべに尋ね逢んと

上「國を出て十七年水子を懷き抱へ漂泊ひ種々の憂艱難あの年迄育て上げても此子が縁の薄いのか我身の縁の薄いのか今に尋ね逢ね共此上にまだ五年が十年でも女の念力是こそ娘よ父御よと名乗合する夫れ迄は

ト仕艸宜敷

同「蚤にも喰さぬ大事の娘相應に物の道理も忠義も知たれどお役に立ぬは右の譯上「卑怯でない未練でない申分け

同「ながくと嘸か氣が急ふサアか入り被爲れ娘立ちやか暇申そふ……(トわさ立て忍を急ぐ忍うじくするコレ立やいのウ

上「云と立兼ね見捨兼ね親子心の隔の一重誰とは知ず忍が脊骨障子越にくつと刺て一トるぐりうんと悶ゆる苦みにははと驚く母親侍従夫婦も仰天し

トわさど、忍の手を取り上手へ行く上手障子の所にて障子内より刀にて忍突れる皆々驚き忍ど、舞臺好き所へ伏す上手障子の内より刀を提げ辨慶出る

太郎見て

太郎「ヤア殺た人は武藏坊

上「斯る狼藉心得難し如何にくと詰掛る母は泣やら氣も狂亂

わさ「扱は夫婦の衆と同服に成て殺しやつたの聞ぬく

上「元の様にして返しやと絶り喚けばこりやい辨慶「聲低に物を云へ

わさ「いや高ふ云ふなせ祈やつた

辨慶「其は段々仔細が有るまあ手負をいたはり介抱せよわさ「何じや……いたはれいたはれと云程なら斬ぬがよい

辨慶「ム、待々見すと物有り

(ト辨慶片肌を脱ぎ見する)

十

上「かし肌脱ばこは如何に下着の衣の紅に大振袖の伊達模様は見たか
同「此片そでは其方にあらふが播州姫路の福井村十一兵衛が處の月待廿六夜の假寐
は其方で有たな

わさ「エー

(ト驚き)其時のお前の名は

辨慶「チ、書寫山の鬼若丸だはやい

わさ「すればお前は娘が父御其父御が又娘をば

辨慶「チ殺たは身代りか主のお役に立る哩

わさ「ハア……悲しけれ共夫れなれば恨みはない是なふ娘尋ねた其方の父御と云ぬ

は辨慶様じやといなア (ト愁嘆宜敷) 御對面申しあげやいのチ

上「抱き起せば起されて

(ト忍苦しき思入にて)

忍「母様何ぞ被仰るそうなが耳が聞へぬ最う目が見へぬ必ず辨慶が側に居てお前も
殺されて下さんなア、ぞつない苦しい (ト忍ど、手を合せて落入る)

上「云ふ聲も次第く、に狭り來てはや玉の緒も切果て此世の縁は絶にけり

わさ「ハア悲しや最早息がせぬ哩のウ

(トわさ死骸に絶り泣く)

上「聞て皆々立騒ぎ見れ共ほどをり斗りにて其甲斐更になかりけり (ト此

間に花の井舞台に下り忍を撈はる皆々愁嘆宜敷) 母は膝に抱き上げ扱も

く、淺猿や如何なる因果な生れ性ぞいの父御を尋ね初たは五ツの時

同「申嬢様余所の子供衆にはど、様もは、様も有私にはなせど、様がござらぬ

上「逢せて被下れと云初て以來一年く、智惠の付に隨ひ分を聞て猶逢たい

とせがむ故在所にも在にあられず其夜は都の衆も有たもの若やと都へ上

て尋ても知なんだも道理こな様で有たもの可愛や此子は一生父御を戀慕

ひ一生物を思ひ詰め今日と云今日尋ね逢責て一時半時も

同「我子か…… (此内始終宜敷一杯に憂ひの仕卿宜敷)

上「父様かど一所にも居る事か詞も交さず然も父御の手に罹り

同「辨慶が側に居て母様も殺されなと

上「云て死だ心の内如何斗り苦かりつらんで、御の仕方も惨たらしい同じ

殺す道ならば互に親よ娘よと顔も見たり見せたり納得させての上ならば

是程には思ふまい

同「ヤレ娘よ、御前に難面く共母に恨みは有まいにたつたま一度母様と云て呉れ

上「云ふて呉よと斗にて空しき死骸を抱きしめ、口説立聲も惜まらず泣居

たる辨慶も諸共に咽ぶ涙を押隠し、(ト辨慶扇にて顔を隠し涙を拭ひて)

十一

辨慶「よしな母が悔み言咄を聞ど均しく扱は我子と飛立斗り生顔も見たかりしがなま中見つ見ては未練の心も起らんかと生ぬ様にるぐりしもの一ト堪め堪よふか辨けい逆も木竹ではなし

上「生れても此年迄後にも先にも唯だ一度戯業なとして生れたる我子と聞て悪くからふか可愛かる舞か

同「其様に泣を見て太郎御夫婦の居やらすばと

上「泣より泣ぬ苦さは鳴く蟬よりも中々に鳴ぬ螢が身を焦す小歌も我身に知れたり是に付ても親の恩の深きを今取分て思知る

同「唐土の奨諭がはくの小そでを母呂と名付け戰場迄掛たりと云其を學ぶにはあらぬ共此下着は母の手づから縫仕立て被下し（ト辨けいよろしく一抔に仕打有る）

上「汝に片袖を奪れたれ共亡母に添心してぬ縫も直さす振そでの此儘四國九國の戰場今日の今迄肌を放さず持たれば社名も知す顔も知ぬ親と子の印と成て十七年目に巡り逢ひ主君の絶体絶命の大事のお役に立ると單に亡母の此小そでに手を通し親子を一所に引合給ふ廣大無邊の親の慈悲子故に親は名を揚る能死たな出來したな

同「とは云つゝも息有中是社尋た父じやいと此な顔でも見たらば嘸嬉からうものウ

是計りが残多い親も一生子も一生云始めの云納め

上「責めて一ト口父様かいのと云ふて呉と生た時の産聲より外には泣ぬ辨慶が三十余年の溜涙一度に堰かけたぐり掛侍従夫婦が貫泣四人の涙八ツのそで八ツの時計を打交て悲しい事の數々と云盡す社果しなき辨慶はつと心付

ト皆々憂ひに沈む辨慶時計の音を聞きつと成て

同「南無三寶歎きに紛れしか半時の時計も聞きしに早や八ツ御首打て渡さんと梶原に契約の刻限時移つては事六ツかしサア太郎殿卿の君の首打て渡されよ

上「是より我は檢使の役と席を改め座えければ

太郎「實にく公事に私の歎かへ難し唯今卿の君の御首打申さん

ト太郎舞台に下り忍の首を切り二重に戻り

上「身繕ひして忍が死骸引寄せ敢なく首を打落し

同「さア受取れよ（ト首を辨慶の前に置太郎切腹する）

上「どつかと坐し返す刀を我身の弓手の小脇に突込みさりと引廻す物に動せぬ武藏が驚き妻は周章で縋り付兎角の詞もなく斗りト皆々驚く花の井太郎の傍へ寄り介抱する

同「ヤア騒ぐまゝ武藏殿我切腹御合點がいかぬか是ぞ御邊が細工の卿の君の此似花
は大概は似たれ共誠は雲の上人と地下人の色香の違ひ梶原が邪智強き眼に見咎め
詮ないことに成てはと思ふに付卿の君の乳母とは鎌倉殿も知し召たる此侍従太郎が
首添て渡さば天地を見抜く梶原も餘も疑ふまじ

上「忍に犬死させまじと御邊が細工に添て遣る心斗の色香ぞや

同「吠るな女房是迄御存ないことを夫泣て奥へ知するか萬事武藏殿の指圖を受け

上「かわさど中好ふ御平産の跡々迄心を付るが夫への忠節

同「心得たるか泣なく……さア武藏殿時移る首打て給

辨慶「ナ、道理を聞上げ辭退申さぬ觀念あれ

ト辨慶刀を抜き太郎の呼吸を測り鬚を木の頭

上「板放し首は前へぞ落にける

ト引ばりの見榮よろしく花の井おわさ泣き伏す片シヤギリにて……幕

御所櫻堀川夜討脚本下の巻終

荊萱桑門築紫鞍脚本上の巻の上

著述者 松本平助

本編は故並木宗輔氏著院本に憑り改訂増補演劇脚本に綴りたる者裏に上の巻を
刊す其洩たるを拾ひ之を完璧たらしむ

大内館の場

關口隼人 横雲將軍

實は大内之助義弘

娘夕しで 多々羅新洞左衛門

義弘御臺所 海月式部

監物太郎 陶全 姜

友方大學 諸士國主城主大勢

本舞臺一面淺黃幕管絃にて幕開き床の淨るり

二

上「富で奢らず貧しうして貪らぬは未可なり富貴にして禮を知り貧して樂めとは弟子に示せし孔子の詞大内之助義弘威勢九州に蔓り自ら武運を朝日に方らへ横雲將軍と尊號し人も許さぬ高胡床浮べる雲の上見ぬ鶯登は我身も知ぬ日の築紫の御殿と時めさける

ト木の頭にて淺黃を落す

本舞臺三間高足の二重正面金襖上手障子屋臺下手繪心にて組板塀の道具前へ松の立樹二重前高欄一間の同階段都て大内館の躰二重に大内之助義弘下手に關口隼人後ろに諸士大勢居並ぶ

上「伺公の諸武士も自ら伸上つたる大名氣質中にも近習の關口隼人御前に進み出 (トよろしく會釋して)

隼人「豫て仰渡されし通り近國の大名より家々に傳はりし重寶今日献上致す筈則ち寶見分の役は多々羅新洞左衛門と承はる夫に付彼が娘か國に希れ成美人なれ共いか成事か終に男の肌觸れず生れの儘なる生娘と諸家中の風聞故御手廻りの召遣ひにと存上意と申てか次迄 (ト仕打よろしく有る)

上「か次迄呼寄せ置候ひしが御慰みに御覽もやと何かな御意に入らざる追

従か髭の塵を取かける義弘寛々と打點頭

(ト義弘聞て頷き)

義弘「勅説と偽り(ト合方) 諸國の寶を集るは某が謀叛一味の證連判狀も古めかしく氣を替て人質の代りにする家々の寶まだ請取るには時刻も早し其間に彼娘一寸面を見んツレ呼出せ 諸士「はア

上「仰に斯くと云次げば頓て御前に立出る世に働強て男撰みに年長けし新洞左衛門が娘夕までは終に殿御の肌知らぬ末通女と見へぬ洒落姿髪の結目に挿したるは梅花に有らぬ白羽の鏑矢筈ならで釵かなんの御用でお召ぞと案事る内も面耻くお書院近く坐しにけり (ト此内向うより夕

しで立て花道にて仕打有て舞臺にかへり會釋して扣へる(横雲將軍遙に見遣り

義弘「夕しではお事よなハテ美事好い器量の汝の親の新洞左衛門忠と義とに凝りし心よりかたくなに育てられ麻につる、蓬連其方迄が身持も堅く一度も男に肌觸れぬと聞及ぶ器量と云ひ風俗迄あつたらしき日影の花

上「殊更男撰みと有れば疑ひもなき手入らすの大むく水揚げは此義弘が抱て寐るとはやりと笑ふ盪の目に仁王の戀する如くなりハツト思へと夕しでは態と額を疊に付け (ト思入有て一寸片手を地につけ)

三

夕しで「私風情の賤しき女お寐間のお伽致せよとは有難い事なれども御臺様の思召し一家中へ聞へても女ひでりは行まいし家來の娘をわつけも無いと我君を笑はせ升もいかゞ此義は御免被爲れませ

上「はんに誓文殿御を微塵も嫌ひは致しませぬ慮外も厭はずつべこへとお詞背くも君が爲めと辭宜する詞の扣へ綱切れもやせんと案事居る
ト仕打宜敷

義「ホ、ウ此義弘が云ひ出す事二言と詞を返す者恐らくは覺へず女に稀れなる大膽者出かしたり爾り乍ら一天下の主と成某十二人迄は女房持ても苦しからず厭でも應でも妾にする
(ト夕しで迷惑の昧)

上「深く見入れえ罅の口遁れる丈けと手をつかへ

夕「冥加に餘る御意なれ共私は些と譯有て一生男に肌觸れて身を穢す事ならぬと云ふ申譯は頭に挿したる白羽の鏑矢細かな様子は父上に

上「お尋有れば知る事と云ふに指出る關口隼人

隼「ハア夕しで殿悪い合點殿様に惚られるは此方の爲に福德の三年め忝いとお請申が上分別親御も浮み上る事其頭にさいて居る白羽の矢が邪魔になり

上「仰向けに寝る勝手が悪くば

同「ドリヤ拔て
(ト立て夕しでの傍へ寄るを手を捻て拂ひ)

上「進せんと立寄るをむつとせき上げ是りや何しやると突飛し

夕「親新洞左衛門が御前に居ねば高なしの我儘男持ぬは何ふ云ふ譯やら仔細も知ず親迄が浮み上るイヤ果報じやの福德のと慾に穢れた土根性そんなむさい女子じやと思やつたら宛が違ふアア慮外ながらサア手は愚か其方の延びた鼻毛の先きでもさへて見や

上「放しはせぬと膝立て直し瞋み詰たる理窟づめ云ひ込められてしかなの

隼人手持無沙汰に尻込みす
(ト隼人手を振上げ夕しでに瞋まれす

どくくと二重下に扣る) 義弘居丈け高になり小賢しき女めと肩先と摺んで引すり寄せ

ト義弘二重より下り夕しでを膝に引すへ

義「めろの餓鬼は十二三から男を見ればびろくど前後を見る當代

上「察する所内證に隠し男を拵へ置き其男への心中たて

同「外の矢先きは通さぬと云ふ心で起請の代りに此鏑矢挿して居るに違ひはせまい

上「矢をかなくつて引起し

同「サア不義者めが名を吐かせ

上「責め問れても夕しでは元より覺へ涙聲
夕「コハ無体なるお尋ね私も木竹の身ではなし

上「惚れて呉る殿御が有ば欲うなふてなんとせふ持に持れぬ譯有て脊丈け
のびた此年迄人の數にもいらぬ身を不便な共被仰れすむごいお主の心や
な更々不義の男はなし疑ひ晴れて給はれと身を悔みたる恨泣涙片手に詫
ければ
(トよろしく仕打有る)

義「ヤアまだ男めをかばひ居るか好々云はせ様有り

上「口には云へど流石は戀目顔で威し立たり居たり身悶へすればお次より

新洞左衛門「ヤレ待ち給へ

上「聲かけて立出るは新洞左衛門しかみ返りし天のじやく隼人はお坐にた
まり兼

ト下手より鳴物よるしく出て夕しでに代つて舞台好き所に隼人は見立ち
隼人「老人の御苦勞に悪い所へ好ふお出で

上「夫に寛りとお遊びと云捨てこそく逃て入る (ト上手へ這入る)
娘を引退けどつかし座し

新「不義の相人が聞度ば某が申上ん娘が隠し男は忝くも我朝の神の司天照太神宮何

んと肝が潰れますかしたか斯う斗りでは合點行まいコレ殿耳を浚へて好ふ聞かし
やれ (ト合方) 此お家大家の御先祖伊勢両宮を當國へ御勸請なされ其社より一人
宛御座子を取給ふ證には家の棟へ不思議に白羽の鏑矢立ち其役を勤めた我娘一旦
神に仕へし女一生男を持すまいと誓ひの爲めに神明の鏑矢を頭にさゝせて不淨を
拂はす

上「夫を無体に抜き取て妾にするの足かけのと爵を御合點か

同「其上是迄頭のかいだるい程諫めても聞入れの無い謀叛の企今と成て異見せぬは
所詮云ても得心は召るまいハテ毒喰は皿ねぶれと諦めてする奉公

上「碌だまに望みも達せず榮耀らしい妾狂ひ

同「未だ早い置召れ

上「病犬の咬付如く只一口にわんど斗りに人もしやくりもなかりけり性急成大
内之助こらへ兼てすつくと立ち夕しでを宙に提げ元の所へどうと投げすへ

ト義弘夕しでの帯を捉り廻してど々突放しきつとなり

義「扱は親め俱に吞込で内證に男が有るな我心に隨はぬ腹癒せ眞二ツに打放し其男
めに鼻明せん

上「大太刀すらりと投放せばわるびれもせず押直り父迄深き御疑ひ

夕「曇りなき身は天道が正直 (ト容を直し合掌して俯く)

上「お手にかゝるが申譯と合掌したる健氣さを見やりもせぬ片意地親仁サア今社と

義弘は父が顔を差覗けばびく共せぬいがみ頼

義「サアくく (ト刀を振り上げる)

上「二度三度威しの刃を振り上げく閃かしてもさよろりが味噌

ト新洞騒がず義弘持て餘し

義「テモ扱もしぶとい奴等エ、是非もなし

上「是迄と既に危うき太刀の下ノフ待てたへ暫くと走り出

ト上手障子内より御臺出て隔て、

御臺「重ねくのお腹立ち御尤とは云ひ乍ら

上「戀ばつかりはかさ押に云ふ程埒の明かぬ物自らにお任せ有らば何卒勸

めて今日の内お前の心に靡さやる様私が世話を致しませふと賺し宥める

物ごしに貞女の証顯はせり戀は曲者鬼にも涙

ト御臺仕打有て宵める

義「情剛さどち女郎打殺して仕廻んとは思へ共なれば又拾ひ物少しの間お身に預け

る返事が遅いと許さぬ

御臺「はあ……

上「詞のたるみに御臺は心得たつた今好いか返詞をお氣遣ひ遊すなど夕し

でも引立て尾を踏む心地虎の間へ伴ひ入せ給ひけり(ト御臺よろしく仕

打有て夕しでを伴ひ上手障子内へ這入る)跡には主従ものをも云す彼方

は皺面此方は工面瞞み合て居る所へ

ト義弘俯き新洞小首傾げる向ふにて

○「國々の諸候より寶を持參

上「呼はる解俄に繕ふ大將の衣紋美々敷坐を占めて待間程無入來る青具の

卓恭しく目八分に指上げてニツ並べし珊瑚の枕是は菊地の陶金姜が寝た

間も放さぬ重寶なれ共勅諭と有れば力なく持參致候と廣庇に押直す次は

豊後の友方大學水晶簾を臺に据へ此簾は其昔普の國より渡りし寶庭に懸

れば風を生じ自然と雨を降しつゝ暑氣の時分はひいやりと西爪もとき夕

立もときと差上る扱其次は肥前の國海月式部が重寶に白龍石と云硯墨摺

度に硯より已れと水を涌出す不性者には第一の寶なりとぞ云ひ上る其外

松浦五島の一族築紫表の國主城主皆家々に傳はりし名物寶を臺に据へ廣

様狭しと列ぶれば見分の役人は新洞左衛門腹は立共其日の役目不性く

に見改め

ト義弘二重に坐り威儀を繕ふ向ふより陶大支海月其他思ひくりに三寶に寶を載て出て舞台に列べる新洞思入有て之を見

新「いづれも寶に相違なし誰か有る此品々御藏の内へ納めよ ○「はア」

上呼はれば伺公の武士てんでに捧げ入体に先は首尾能く納りしと諸國の城主も安堵の胸皆々旅宿へ立歸るト諸士出て寶を上手へ運ぶ陶外捨臺辭よろしく會釋して下手へ這入る）遙にさがつて筑前の城主繁氏の執權物に騒がぬ監物太郎寶も持す悠々と白洲の庭に入來るを義弘つくづく打守り

ト向より監物太郎腕を組みしづくと出る花道榊形にて一寸會釋し舞臺にかゝる

義「九州の大名より殘らず寶を差上げしに加藤の家より何うして寶は送らぬ宣旨を背くか但しは氣儘か返答せい

上「さめ付れば些度も動せず

太郎「御尤の御不審勅諭と有る上はいかで違背の候へ併築紫は小國故差上る寶はなし

上「云も切せず左右は云はせぬ

義「大名の家に寶なみて家督の繼目何を以て規模とする

太「イヤ我國は仁義禮智

上「五常を寶として國家を治る

同「但し此お國には器財を以て寶とし君子の教を寶とはなされぬか

義「ウム……ト思入

上「理窟をつめて云込れば元來不才の大内之助返す詞もなき所をこたへ兼て新洞左衛門目出を剝出し

ト新洞さつとなりて

新「コリヤく監物ト合方）夫は唐土臨瀆の會に善を以て寶とすは伍子胥が云し口真似喰ぬく加藤の家には齊國より渡りたる夜明珠といふ名玉有る筈

上「今玉女神と神に仰ぎ尊敬する事紛れなし是非玉を渡さざれば大軍を以て押寄せ家國共に奪ひ取るどのつ引させぬ手詰の難題此場を遁れて分別と無事を繕ふ當坐の請合

ト太郎思入有て手をつき

太「玉女神を夜明珠と御存なれば力なし成程寶珠を渡申さん爾りながら

上「年を數へて廿と限り終に男と肌觸れず交合の道を知ぬ女有らば玉を迎にふるべし

同「若も年に過不足有るか一度でも男に肌觸れ身の穢れたる女の手に携へ持ては忽ち玉の光りを失ひ石瓦の如くと成る其割符の合ふ女が有らば何時にても玉を渡すに相違なし」(ト會釋して立つ向ふへ行かける)

上「某は先づお暇と立歸るを

夕「待た〜便の女是に有り」(ト上手上障子内より出る)

上「走り出たる夕しでが御前に向ひ頭をさげ

同「不義の男が有る故お心に隨はぬものお腹立ち

上「其お疑ひを晴す爲め終に妹背の道じらす身を穢さぬと云申譯け此お使を

同「私に仰付られ下され」(ト仕打有て平伏す)

上「思ひ入てぞ願ひけり監物太郎もぎよとせしが

太「コリヤ女身の穢れぬが定ならばいかに玉は渡さふが見事實の見分するか

上「何かな云ふて困らす思案

新「サ〜氣遣ひすな其見分は此新洞左衛門

上「娘に連れ立ち行からは似せぬは獨まぬ〜

同「シタガ夕しで其方には惚れた人が有る此方の體は清淨でもよそから穢れを添ると

いふものツレ其和郎が思ひ切るといやらねば使には行れま

ト思入よろしく云ふ

上「戀慕の羈絆を切せん爲め大内が耳にうて響けを聞流して不興顔返答もなく坐を立て駈込む向ふへ御臺所立ふさがつて

ト義弘思入新洞と顔見合せ夕しでに心を寄する仕打よろしく立ち上手へ行ふとする御臺と搦み扣へ

御「申殿様女獨りに繋れて大切なる夜光の珠此度請取給はずば禁裏表の首尾い

上「夕しでをさつぱりと思ひ切たる證據を見せ使を仰付られよと彼方此方でせこめられ當惑したる大内之助何思ひけん振返り後ろにかけたる弓追取り件の鏑矢引番ひ」(ト義弘と鏑矢を取て弓を引さしぼり)

義「命に代へて某が思ひ込たる戀なれ共大望成就の妨げなれば此戀ふつ〜思ひ切る證據の鏑矢

上「請取れと切て放せば松の木にはつしと立たる有様を」(ト仕掛けにて下手松の立樹に矢立つ)夕しで悦び走り寄り矢を抜き取て押戴き」(ト矢を板で持ち仕打になる此使を任課せば枕一ツで廿迄ね〜した事を世上へ云

ひ譯君の心もはれくと曇ぬ女の鏡にせんと帯引しめる親子の勇み監物
太郎を先きに立て白羽の鎗矢もとゞりに挿鬚してを
ト義弘尚ほ夕しでに心殘る仕打太郎新洞立てまづとなる御臺隔て義弘皆々見
榮よるしくシヤキリにて幕

（Faint vertical text, likely bleed-through or a second column of text, mostly illegible due to fading and scan quality. Some characters like '立' and '見' are visible.)

遊萱桑門築紫鞆脚本下の巻

著述者 松本平助

監物太郎館の場 (上の巻續々)

上「橋立あたり見廻して女之助の放埒も福三年時の用仕課せたりと思ふ所

ト多々羅新洞左衛門生れ取たる氣はいらち待久敷くて次の間より歩み出

ト藤子にて新洞左衛門向ふより出で花道にて舞台を見

新「コレ女中娘は寶珠を請取たか」ト云ひ乍ら舞台にかゝりまだか何うじやぞ聞て

お呉りやれ

上「べらく何して居る事ぞとふくれ返つた髭頬を引伸さんと橋立が頼て

床几を攀らせ

ト新洞上手へ四邊を見廻し心を配る橋立困りし体にて

橋「誰ぞ寶盆を茶持て来い

上「と馳走より

新「イヤ茶はたべぬ竟は嫌ひ滅多に馳走召れても請取る物に遠慮は無いで床几は役

上「思には被さど腰打かくる其内にも橋立は二ト間の首尾いかゞと思ひ立つ居の狼狽廻るを

同「コレキ女中 橋「ア、あゝ

同「きよろしくと何とめさる待兼て鳥帽子首こはばり申と云つて呉召但しは直さに行ふか

上「立上れば (ト立つ橋立押へて)

橋「ア、是申今カ祭の最中

新「ヤ……ナニ祭では

同「イエイナ彼夜光の玉のお祭

(ト思入有て進み)

上「紛らかし隙取る方便に傍へより

同「お家の祭は先づ最初が鼻高其鼻の高さが

上「三間半男にしたら廢り者

同「次が御輿と挑燈其挑燈が

上「併搗て事のちちが明かぬかといかふ

同「私は案事です

(ト云ふ新洞頭を振り)

新「ア、是神事の咄聞には参らぬ御玉斗を請取にケ様の隙入合点行す

上「瞳み廻せば (ト四邊を見廻す)

橋「サはうと輕操に何ぞいな玉といふに慮は外く唐土には六和が瑛我朝にては環龍の玉伊勢の國にはお杉とお玉飛んだは人魂怖いは貴方のお目玉

上「下女の玉でも輕やしう請取らる物かいな

同「まアお前はおいしくつて

上「お名は何んと申解 (ト手をつき頭を下る)

新「ハチ面倒な事を尋る名は新洞左衛門年は六十

橋「したかナンジヤても探もくくさつても若いお顔の

新「ア若ふんる 橋「お耳も聞へお目も好いか

同「耳も目も好ふるてや 同「お齒はる

同「夫もよいてや

橋「サア其よい内から人は養生折や疝氣も出やうかな

新「ハテ出やうと儘さ

橋「イエ、く左右氣をいらつがいかひか毒

上「それく頭顱によつばと白髪ヲエ接であげましよと立寄れば突飛し

ト寄るを新洞拂ひ

新「エ七面倒なめ

上「片邊に立て大聲上

(ト障子屋臺に向ひ)

同「ヤア〜娘夜光の珠を請取しか何して居るぞ

上「つかふどに呼はる聲の響きてや心靜に寶塔を携へ出る夕しでが跡に續いて女之助出るや否尊敬し

ト上手障子内より夕しで先に女之助出て下手に天を突き夕しで眞中に寶塔を置く

女之「忝く寶塔の内に込めたるは闇を照す事日輪よりも明らか成る故

上「夜光の珠と名付たり

同「箇程貴き御寶を輕く敷請取れし

上「夕しで殿は仕合せと挨拶すれば

「皆是お前のお世話故

(ト會釋して扣へる)

上「表向と成互の辭宜新洞左衛門笑坪に入

新「ホ〜ヲ娘寶を異議なく請取たか出かした〜併某見分の役改める爲め拜禮せん上「いづれも俱に拜れよと云ふに隨ひ女之助橋立共は頭を下げてはつと斗に敬ひ居る(ト皆々平伏す)夕しで心に信を取るとなれも珠の御威徳拜み給へと寶塔を開き

見ればヨハいかに眞黒々と黒玉の曇を捏ねし如くにて是はと斗が夕しで親子女之助も橋立も俱に呆れし顔付にて(ト各々顔見合せ俯く)暫し詞もなかりしが新洞怒つて

新「ヤア大盗人の監物太郎改めすんば似せ物を持って歸す巧みよな

上「イデ寶藏へ踏込み掴んで來んと駈行向ふをさつと明け内より飛出る監物太郎腹せとくるめのしら〜敷

ト新洞さ〜となる太郎上手障子内より出て三重に立ち

太「コリヤ〜新洞先達で云如く不淨の女が請取らば玉の光りを失ふといひしは爰ぞ其女に詮義が懸つ其處のけ〜

上「打て變りし詮義の裏釘いがみか〜つて橋立が

橋「コレ夕しで殿身に覺へ有るならば有様に白狀あれ

上「ト間の内で不義がましい猥りな事はなかりしかとまさ〜しげに問ひかけられ何と言譯夕しでが可爲き様なく髪に挿す白羽の矢を抜くと早や矢の根を喉に突立る是はと驚く人々より半狂亂の新洞左衛門抱き抱へて(ト夕しで切なき仕打と〜矢の根にて喉を突く皆々驚く新洞合引を下り傍に寄

新「コリヤ娘わたりや何故に自害する言譯なくば無い様に思案も有ふに情なや

上「大事の娘を殺すかどさしにも猛き武士の子故の關に目もくらみさふと坐りて泣居たり今を限りの夕しでが涙片手に(ト苦しき思入れにて)

夕「ノウ耻かしや自らは此お館へ来るよりも去るお人をば思ひ初め情の道に迷へ共大事の役目と心の駒

上「繋ぎ止めしを情なや御内寶の饗應酒

同「あれ成神酒を呑よりも不思議や五臟に浸渡り大事を忘れ何のその

上「儘上の上にはも凭れ遂ひ下紐を解き初めて是非なく身をば穢せしとや言譯ならぬ徒らと詮義に逢て耻かいて斯くなり行は神の罰神明怒りの鎧矢に射殺さるゝと覺悟して死る心の悲しさを推量してと泣涙袖に餘れば血に染みて見るめいいと哀なり(ト憂の仕打)様子を聞て新河左衛門すつと立て走り寄り娘が云ひし神酒徳利兩手に掴んで

ト三寶の徳利を兩手に持ち

新「ヤアヲ心得す尤若氣と云ひ乍ら左程亂るゝ娘に有らぞ仔細は此中顯はさん

ト徳利を破る中より井守出る

上「様のかまちは打付くゝ打破る中を井守の雌雄懸れ出ればしつかと捕へ

同「扱こそくゝ唐土張華が博物志に交合の蜥蜴を引わけ酒に浸して其氣を吞せば忽ち女の心亂すと書顯はす其理を知て娘に吞せ性根を亂し徒らさせ身が穢れた故光り失せしと科を此方へ塗り付て賈物渡す下拵へ

上「扱たぐんだり拵へたり

同「憎さも憎し不義の相手(ト刀に手を掛け立て仕打有て詰る)

上「是へ出せずだくゝにためして胸を踏さんと三寸真魚板見抜し両眼瞋みつけて詰上するちつ共隠せず女之助

女「其不義の相手は某(ト坐を進み容を正して俯く)

上「御存分と押直る

新「チ、好き覺悟觀念せよ(ト抜て鬚す)

上「振上る劍のかげ(ト夕しで隔て)ノウは待てと夕しでが苦しむ跡に氣も弱り心も折れて詮方も泣より外の事はなき(ト新河切り兼て氣を直す)夕しで拜むと、劍を投げて坐り泣く(ト苦しき中にも親の顔じるゝと見てかいとじや)(ト泣き仕打になる)親獨り子獨の私に別るゝお前の心悲しい上にお腹も立ふ去り乍ら壁へ井守の業ならずと一寸見るから思ひ初め心が先さへ穢れた物

夕「帯紐解すと御寶の光り失せいで何んどせふ

上「假の契りも二世の縁枕かはせば我殿御尊は子といふ世の慣ばし私が死
だ跡にても篋と思ひ念頃にかいとしがつて下さんせお主様も父上を親と
思ふて折節の訪首信を頼み升親に先き立つ我心推量して可愛やと思ふて
一ト言未來迄夫婦と云て被下としやくり上げたる哀れさを見るに身に染
む橋立がせめての事と介抱し万事を胸で諦めて詞に出ねど心には無憎か
らふ云譯するにもしられぬ品皆是前の世の約束と思ひ諦め給はれど歎け
ば俱に女之助

ト橋立思入の仕打あつて泣伏す女之助涙を拭て

女「是迄盡せし悪性のとゞめと成た今の悲み未來は扱置き後日万劫契りは變らじ夫
婦ぞ

上「云聲耳に經陀羅尼物も得云す嬉し氣に合す両手が暇乞あへなく(ト夕
しで落入る)息は絶へにけりわつと泣出す新洞左衛門ぢだんだ踏で

新「エ、しなしたり

上「情なや (ト泣て涙を拭ひ)

同「我堅意地な心から一生夫は持たさぬと云たを誠と思ひつめ敢ない最期を遂げけ

るよ未來で夫婦と悦べ共悲しむ親が此世から夫が見へるか白痴者思ひ出事ばつが
りを云て死すと便りなき

上「此身を早ふ迎へて吳六十越て子に離れ何を頼みの娑婆世界情なの我身
や不便な娘の最期やとしやくり上げたる逸微涙堤もされて大川に泥の淵
なす如くなり俱に衰れと人々の歎きの内に監物太郎彼寶塔を目通りに据
へ女之助を引直し

ト太郎寶塔を置直し女之助の傍に寄り刀を手に持ちて

太「汝此如く光りをひし不義の相手

上「討て渡す覺悟せよ(後ろに立ちて)

同「サア新洞左衛門受取れよ

上「云ふ聲に涙拂ふてすつくと立 (ト新洞立て)

新「ヤア人そばへすな其手は喰ぬ義理立てせば助けふと思ふか……いつかなく眼
前娘の敵人手は頼まず我手にかけて眞二ツ

上「恨みを晴す其處退けと飛掛つて抜打に發矢と切たは件の明玉

ト刀にて新洞玉を切る皆々呆れる 是はと斗り人々は呆れて詞もなかり
しが女之助聲をかけ

女「手か廻りしか新洞左衛門

上「せかず共さア首と差付れ共目にかけず切割し玉引搦み

ト女之助合掌にて扣へる新洞切りし玉を両手に持ち

新「已れ陰陽和合を嫌ひ能ふ光り失ふて娘に自害させたなア我子の敵思ひ知たか加藤の家の名玉は目利の眼からは悉皆藍玉持て歸り主君に見せ

上「耻顔はして腹癒て呉ん必ず跡で其玉は似せ物など争ふな

同「眞の賈が有るならば石動や御臺に持せ早く此家を捨させよ

上「云教へたる詞の裏表は怒り心には責て娘が手向共なれよと掛る情をば

袖に隠して立歸る（ト向ふへ新洞玉を搦りし儘捨臺辭よろしく這入る）

折よしと御臺若君駆け出給へば女之助

ト正面襖より御臺若君出て二重に坐る女之助會釋して

女「新洞が詞のはし御両所の身の上氣遣ひ幸ひ我君高野に御座有るとの風聞夫を力にか供せん

上「卒させ給へと勸め立伴ひ出れば監物太郎

太「アレ待て弟汝生れ付て好色者未だか若き御臺所預け遣る事覺束なし

上「云ふより頼て井守を引裂きたる血を腕へ塗付

女「コレ見へ（ト座り直しきつと成り）

上「兄者人

同「井守は不義を勸れども其血は反つて不義を顯す唐土秦の始皇三千人の宮女に不

義あらんかと疑ひ深く残らず臂に是をぬる不義有る者は忽ちに落て跡なくなるた

めし爾るに依て井守といふ字を宮女を守るといふ心で宮守と書傳ぬ

上「我朝にては万葉集脱ぐ杳の重る事の重ならば井守の試甲斐やなからん

同「杳重りてさへ試は落ると詠し歌

上「まして三代相恩のか主に對して不忠不義天命いかでと云はせも立す

太「チハ出かした

上「一言が兄の情の餞別や御臺若君立別高野の山の峯に在る我夫諸共歸り

來んとつらね給ひし言の葉も夫れは待とし待迄はか名残り惜しやと橋立

がかけ寄を押隔て互にさらばかさらばの聲を力に忘れ御伴ひ館を出給ふ

ト御臺若君旅の仕度あつて泣々下手へ行く橋立名残を惜む太郎刀にてさへ

隔つ石動御臺も名残りを惜み願みく行く蹟くを木の頭皆々泣く

上「國に思ひや残るらん……………ト和歌にて幕

高野山の場

菫 萱 法 印 石 動 丸
 實は加藤左衛門繁氏
 師 の 坊 坊 主 五 人

本舞台一面半舞臺正面山々の遠見上手岩山道具にて登る様拵へ下手岩山の張抜き日覆より松の釣枝舞臺好き所の石地藏捨石よろしく高野山の体風の音に鉦を冠せて幕開く

上「行空の雲間に近き八葉の峯に紫雲の飄飄し高野山と聞へしは三面に山連なり源一水にして万水東に流れ大師二丈に道をならひ開き始めし靈地とかや (ト此時下手より坊主五人出て)

- 「何んと各々菫萱坊は修行斗り又此方は酒斗り
- 「イヤ兎角浮世は酒の事はを御覽あれ (ト徳利を股より出す)
- ◎「然らば愚僧も御覽に入ん (ト懐より竹皮包を出す)
- ▲「是は又蛸の足か拙僧は玉子焼でムる
- 「然らば爰で一酌致し此方は御馳走に與らん

皆々「サア〜飲みませう〜 (ト酒を飲むとよろしく)

上「いたはしや石動丸かゝる難所をたど〜と心も空に浮き草の根ざしの父は顔知らず名のみ知邊に尋ね行く袖の涙を哀なる思ひ高野の谷川や弓手は岩間馬手はあまの山かろし降に煙の一むすび見上て通る不動坂踏も通はぬ丸木橋名残情けも横吹きの嵐に木の葉散り果て心細道つく杖は下りつ登りつ行先を問へど岩根の松蔭に暫し休らひ給ひける

- ト向ふより好き時分出て花道にて振有て舞台にかゝる坊主驚き
- 「是は〜何處から來たか可愛の兒
- 「此處へは何にしに御座つたや
- 石動「ア〜自らの父上を
- ◎「アムシテ何處の寺で名は何んと云ふぞ
- 石「ア〜其お寺は知らず國は築紫の……
- 「ハテ愚僧等は妻子は無し誰で有ふ此やうな可愛を残して出家するとは鬼か蛇か
- ▲「チ、此頃來た菫萱が何んでも築紫とやら
- 「はんに尊をすれば影とやら菫萱がソレ〜
- 謠「百年の榮耀は風の前の燈さどれば我も佛なり

上「煩腦菩提と諦めて加藤左衛門の尉繁氏入道苺萱道心と名を改め佛法修行の山阪をたどるも後世の便りかや石動親子の奇縁にや

ト向ふより苺萱出て花道にて思入れ有り舞台にかゝる

○「チ、苺萱幸ひく今此兒が此山に築紫の人で出家した人を尋ねて来たが此方は
朧か築紫ソレ其子やを尋ね申しや (ト石動を苺萱の傍へやる)

上「思を傍に走り寄り

石「申御出家様此御山に今道心のましさば教へてたべ

ト「とあれければ

苺「コハ興がる少人かな九百九十の寺々毎日入来る初發心

上「昨日剃たも今道心一昨日剃たも今道心

同「左様に尋ね給ひては知れがたし俗の時の名をいふて

上「尋られよと身の上の事共知す仰育る

石「左れどよ尋は自が父上

上「二ツの年に別れし故お顔も見知らず

同「元は筑紫の松浦堂加藤左衛門繁氏様

上「云ふより扱は我子かと取纏らんとしたりしが

ト仕打有て俯く坊主五人見て

○「加藤く扱ても聞た様な名

▲「併し我等はお先へ参り升ぞや (ト皆々上手へ行)

苺萱見送て石動を見涙を拂ひ思入有て

上「佛前にて誓ひを立てたる恩愛の妹脊爰ぞと思ひよそくしく

苺「フム年も行ぬに遙々と慕ひ來る志

上「誠の父が聞れなば賑や嬉しくなつかしく飛付程に覺されん爾り乍ら

同「此山の掟にて譬へ巡り逢ふたり逆名乗合ふ事かつふつ叶はず

上「早やく國へ歸り母御を大事に冊くが又一ツの孝行と云ひ教れば

ト石動泣き乍ら

石「イヤノウウ我國は大内といふ者責惱し母様諸共此山の麓迄参りしが

上「悲しき事は母様が道の勞れに煩ふて命の内に只一ト目父に逢せて吳よ

どのお歎き情けと思ふて御有家御存ならば教へてと目に持つ涙はらく

と押へ兼たる有様に (ト仕打よろしく泣く)

苺「我こそ

上「と名乗て聽そかいや勿体ない師の御坊の戒めといふて遙々來た物を知

す顔見ぬ顔がどふなるものぞ不憫やと胸にせき来る血の涙こたへ兼て思はずむ(ト悲みて花桶を毀す)わつと斗りに泣給ふ石動丸目さどく

石「左程に歎き給ふのは若しや父上ではあらざるや
上「早く名乗て給はれと縄り歎かせ給ふにぞ亂れし心の折ふしは後の方の岩蔭より師の阿奢利の聲として(ト上手岩山の上に師の坊立て下を見)

師「ヤア〜苧萱棄恩入無爲〜の誓ひを忘れ給ふな
上「制せられて苧萱は起上つて振返りハア、左様じや迷ふたり(ト苧萱立て珠數にて身を清め涙を拂ふ師の坊消す)誤つたり今此三界悉走吾子いづれを我子と思ふべき師の手前も面目なしと衣の袖を打拂ひ〜

ト山彦の音
苧「ハ、小さかしき少人かな
上「あわれを俱に見捨ねば我を父よと縄る事穢らはしや

同「おとが尋る繁氏入道此山におはせしか共諸國修行に出給ひ今は行衛む知れざるぞ
上「いそぎ下山し母親の病氣の介抱台れよと難面〜いへど何處やらに残る詞のいや勝り

石「何に父上は行衛む知れず(トよろしく泣き仕打になる)
上「此山におはせぬとやノウ情なや淺猿や我は兎もあれ母様が焦れ死を被爲ふかと夫ばつかりが悲しうて後へ戻るも戻られず似た人にても有るならば逢せてたべと搔口説心ぞ思ひやられたり俱に張裂く思ひをば押隠して懐より包し薬取出し

ト苧萱涙を拂ひ懐より薬包を出して石動に渡す
苧「是は師の御坊一万坐の護摩を燒き調合有し妙薬母御に用ひ看病あれ來た道筋は難所にて草臥足では叶ふまじ此方へ行ば花坂とて平地も同じ事

上「馬も有り駕も有りいざ〜立て行れよと心強くも引立られ石動丸は泣く〜も(ト苧萱石動の塵を拂ひ等杖を渡す)薬と有を力にて押載さ〜是非も涙の泣別れ迷ひ道をばそこ爰と教へ乍らも苧萱は心元なさ思はせもひかる〜縁の友綱や

ト石動花道へ泣々行く苧萱岩山に登る始終両方にて振返り〜見ると〜走つて石動向ふへ這入る苧萱向ふを見て足をこらし岩山より仕掛けにてこり落るを木の頭

上「見べ〜隠れの慕ひ行〜
三十一

下町堂向ふを見る思入れ風の音鉦にて拍子

幕

三十二

町堂桑門築紫轆下の巻終

明治廿七年十月五日

印刷

明治廿七年十月五日

發行

定價之錢

京都市下京區東洞院佛光寺南入
高橋町十三番戸

著作者 松本平助

京都市下京區七條通間之町東入
材木町六十八番戸

發行者 田中幸次郎

京都市下京區大和大路四條南入
龜井町十六番戸

印刷者 坂田萬治郎



版權興行所有

